

はじめに	1
第1章 近年の校地・校舎基準緩和のプロセス	2
1.1 通学制における遠隔授業	2
1.2 通信制では一度も通学せずに卒業が可能	3
1.3 校地の面積基準の引き下げ	4
1.4 特区により校地・校舎を賃貸による大学が認可	5
1.5 特区による運動場・空地要件の緩和	6
1.6 特区による校地・校舎を持たない通信制大学・大学院大学	6
第2章 大学をとりまく環境の変化	9
2.1 インターネットの普及	9
2.2 大学間の競争激化	10
2.3 社会人学生の増加	12
2.4 グローバル化	14
2.5 市場原理への適応	15
第3章 大学における校地・校舎の位置づけ	17
3.1 大学の目的から考える	17
3.2 設置基準上の校地・校舎の位置づけ	21
3.3 寄附行為から考えると	24
3.4 認証評価機関の評価項目から考えると	25
3.5 事務組織面から考えると	27
第4章 大学における校地・校舎の役割	31
4.1 教育の場	31
4.2 社会化の場	31
4.3 研究の拠点	33
4.4 学生募集	34
4.5 資産運用	34
4.6 各大学におけるキャンパスの位置づけ	35
第5章 大学のIT化がもたらすもの	36
5.1 学生の情報化がもたらしたもの	36
5.2 分散ネットワーク型キャンパス	36
5.3 インターネットによる教育	37
5.4 インターネットによる教育に必要な機能	38
第6章 eラーニングは校地・校舎を不要とするか	39
注	41
参考文献	44
資料	46

## 参考文献

- ウォルター・J・オング 桜井直文・林正寛・糟屋啓介訳 『声の文化と文字の文化』 藤原書店、1991年
- ジェイ・ディヴィッド・ボルター 黒崎政男・下野正俊・伊古田理訳 『ライティング・スペース』 産業図書、1994年
- ピエール・ブルデュー 安田尚訳 『教師と学生のコミュニケーション』 藤原書店、1999年
- マイケル・G・ムーア/グレッグ・カースリー 高橋悟訳 『遠隔教育』 海文堂、2004年
- マーク・J・ローゼンバーグ 中野広道 『Eラーニング戦略』、ソフトバンクパブリッシング 2002年
- マーチン・トロウ 天野郁夫・喜多村和之訳 『高学歴社会の大学』 東京大学出版会、1976年
- マーチン・トロウ 喜多村和之訳 『高度情報社会の大学』 玉川大学出版部、2000年
- ヤーロスラフ・ペリカン 田口孝夫訳 『大学とは何か』 法政大学出版局、1996年
- 
- 天野郁夫 『日本の高等教育システム』 東京大学出版会、2003年
- 天野郁夫 『大学 - 挑戦の時代』 東京大学出版会、1999年
- 荒木浩二 『実践eラーニング』 毎日新聞社、2002年
- 生田目康子 『みんなのeラーニング』 中央経済社、2002年
- 稲葉秀明 『大学は出会いの場』 大学教育出版、2003年
- 小原芳明編 『ICTを活用した大学授業』 玉川大学出版部、2002年
- 笠木恵司 『インターネットでMBA・修士号を取る』 日経BP社、2002年
- 片岡徳雄・喜多村和之編 『大学授業の研究』 玉川大学出版部、1989年
- 加藤潤 『マルチメディアと教育』 玉川大学出版部、1999年
- 木村忠正 『オンライン教育の政治経済学』 NTT出版、2000年
- 木村泰之・都築誉史 『集団意思決定とコミュニケーション・モード コンピュータ・コミュニケーション条件と対面コミュニケーション条件の差異に関する実験社会心理学的検討 実験社会心理学研究』 日本グループ・ダイナミックス学会 第38巻第2号、1998年
- 小林正幸 『なぜ、メールは人を感情的にするのか』 ダイヤモンド社、2001年
- 坂元昴監修 『eラーニング・マネジメント』 オーム社、2003年
- 島田博司 『メール私語の登場』 玉川大学出版部、2002年
- 鈴木勲 『逐条学校教育法(第5次改定版)』 学陽書房、2002年
- 武内清編 『キャンパスライフの今』 玉川大学出版部、2003年

- 高島秀之 『IT 教育を問う』 有斐閣選書、2001 年
- 二宮克美共著 『たくましい社会性を育てる』 有斐閣選書、1995 年
- 『アメリカ留学事典(2004 年版)』 アルク、2003 年
- 松岡一郎 『デジタル・キャンパス』 東洋経済新報社、2001 年
- 松本卓三編 『教師のためのコミュニケーションの心理学』 ナカニシヤ出版、1996 年
- 宮田加久子 『電子メディア社会』 誠信書房、1993 年
- 森田正康 『eラーニングの常識』 朝日新聞社、2002 年
- 森本晴生 『私立学校施設設備の管理実務』 霞出版社、1994 年
- 吉田文 『アメリカ高等教育における e ラーニング 日本への教訓』 東京電機大学出版局、2003 年
- 吉田文 『カレッジマネジメント』 110号 リクルート
- 吉村克己 『eラーニング』 エイチアンドアイ、2001 年
- 和田公人 『失敗から学ぶ eラーニング』 オーム社、2004 年
- バーチャルユニバーシティ研究フォーラム発起人会 監修 『バーチャルユニバーシティ』  
アルク、2001 年
- 青山学院大学総合研究所 AML プロジェクト 『eラーニング実践法』 オーム社、2003  
年
- 大学設置審査要覧(平成 16 年改定) 文教協会、2004 年
- 通信・遠隔教育研究会編集 『大学・大学院通信教育の設置・運営マニュアル』 高等教  
育情報センター、2004 年
- 日本イーラーニングコンソーシアム編 『eラーニング導入ガイド』 東京電機大学出版  
局、2004 年
- 文部法令研究会監修 『文部法令要覧(平成 16 年版)』 ぎょうせい、2004 年

## 資料

### ヒアリング調査結果

2004年5月17日および5月27日から28日にかけて各大学が実際に、キャンパスをどのように位置づけているかを調査するためにヒアリングを行った。調査対象は、通信制を設置している大学およびeラーニングを積極的に取り入れている大学とした。

#### ・ 大阪芸術大学

ヒアリング：2004/05/28 通信教育部、川村良広様、吉丸卓見様

2001年より通信教育課程を全14学科中10学科に設置。しかし、スクーリングでキャンパスへ登校することは必須で、唯一、eラーニングを導入している音楽学科においても、登校は必要となっている。実技・実習が多く、自宅などで必要な施設を持つことが困難であり、キャンパスでの学習が不要になることはないと考えている。また、自然が豊富にあるキャンパスではそこから受ける刺激の質、量に違いがあり、創作活動に影響を与えることもあり得ると考えられる。

#### ・ 日本福祉大学

ヒアリング：2004/05/29 通信教育部事務室、橋村健人様仲・道雅輝様

2001年より通信教育課程を設置。キャンパスが都心より離れているため、キャンパスを目当てに入学する学生はいないと思われる。とくに社会人においては、キャンパスの遠さが入学意欲をそぐ原因となっている。そのため、通信教育に力を入れており、インターネットによるコミュニケーションも促進している。学生が自由にネット上に掲示板を作り、活発な意見交換を行っている。これらの掲示板により、インターネット上にも文化が形成されると考えている。また、通信制の学生や入学検討者にとってはHPがキャンパスそのものであり、HPから伝わる雰囲気は校風と言える。しかし、そのHPのイメージは事務局が主導で作成しているため、大学の建学の精神や実際の大学の校風を反映しているとは言えないとしている。

#### ・ 同志社女子大学

ヒアリング：2004/05/27 情報メディア学科 川田隆雄助教授

2004年4月よりeラーニングを情報メディア学科で導入した。通学制における教育の補助的な手段として、教員の負担にならないように配慮しているのが大きな特徴である。例えば、学生から教員へのメールやチャットはできない。これは、1対1のコミュニケーションが発生すると、返答に大きな労力が必要となることや、メールでのコミュニケーションによる感情的なトラブルを避けるためである。通学制であるので、個別のコミュニケーションが必要な場合は、直接教員の研究室を訪問することも可能であるので、あえてeラーニングで実現する必要がないと判断している。また、学生からの質問も受け付けていないが、学生同士の掲示板やチャットでのやりとりを観察し、そこから学生の疑問を抽出した上で、FAQとして回答している。これも個別のコミュニケーションを避けるための方法

である。このように、同志社女子大学では、個別のコミュニケーションや教員と学生との直接対話はキャンパスで行い、eラーニングは全体に対しての連絡手段および、学生のレポート提出に限定している。女子大という特性もあり、個々の学生に直接、丁寧に指導するために、キャンパスを必須のものと考えている。

- ・ 京都造形芸術大学

ヒアリング：2004/05/28 芸術学部 矢野一輝教授

芸術系の大学としてはもっとも早くから通信教育課程を設置している。京都の北部という立地、知名度の点から考えて、全国から学生を集めることが難しく、通信教育に活路を見出した。そのためeラーニングについての研究も進んでおり、キャンパスなしで教育が可能であると考えている。しかし、まったく無条件に可能としているのではなく、キャンパスでしかできないこと、逆にネットワークを使ってしかできないことを分析し、それぞれの特徴を生かした教育を目指している。キャンパスでしかできないこととしては、スキップやノンバーバルなコミュニケーションをあげている。逆にネットワークでは、キャンパスでは出会えない人との出会いが可能である。学生の多くは1日に30人程度、しかも同じ大学の学生としか出会っていないという調査結果を元に、いかに多くの人との出会いを実現するかに工夫をしている。

- ・ 早稲田大学

ヒアリング：2004/05/17 人間情報科学科 西村昭治助教授

2003年より一部の選択科目である実習を除いてインターネットのみで卒業が可能な通信教育課程を設置した。通学課程の授業を収録、編集の上、翌年に通信課程の学生が視聴する仕組みである。したがって、すべての授業がスクーリング履修形態で、かつ非同期型である。教員と学生が時間、場所ともに共有しないために、毎時間の授業ごとに掲示板を設け、そこで学生同士がディスカッションする。このディスカッションに対し、教育コーチと呼ばれる、大学院生レベルでかつトレーニングを受けた人が評価、誘導をしている。

学生は一度もキャンパスに通うことなく卒業が可能であるが、入試に面接を課しているため、学生と教員は面識があることになる。また、卒業論文指導は一人の教員が1、2名の学生を担当するため、時にはキャンパスで教員との個別指導を受ける。

2003年の入学者数は169名で、1年目で退学したのは5名のみであり、1度もキャンパスに足を運ぶことのない大学でありながら、高い学習の継続率となっている。早稲田大学においては、入学者の多くが社会人であることを勘案しても、教育に関してはキャンパスの有無は問題とならない。

- ・ 八洲学園大学

八洲学園大学は2004年に開学した通信制の大学である。インターネットを利用することで、一度も大学に通うことなく卒業できることを特徴としている。特区ではなく、通常の大学通信教育設置基準により設立されているため、校地・校舎は所有しているが、学生は1度も大学に通う必要はない。大学通信教育設置基準で必要とされる面接指導は、インタ

ーネットを利用し、教室で行われる面接指導を生中継で学生に送信している。生中継のため、学生はその場でチャット機能を使って質問をすることができる。教員の様子や教室の様子は動画で送られているが、インターネットで受講している学生側の様子を音声や動画で知ることはできない。入学者の半数が遠隔地であることから、スクーリングを教室で受講するよりインターネットを利用して自宅で受講する学生の数が増える。チャットで質問できる気安さから授業中に積極的に質問するなど、対面によるより活発なコミュニケーションが行われている。また、家庭教育課程、人間開発教育課程という学問領域の特徴から社会人の割合が多く、学生の社会化の必要がない点でもキャンパスを必要としない要素が整っている。しかし、開学間もないため、その成果については継続した検証が必要である。